

と記せり、茲に拏鬪二十年と曰へるは、果して何年より數へたるものなるかは、明かに知る可きに非れども、假りに之を最も遅く見て、句録莫賀が黠戛斯を引きて廬駁可汗を殺したる前年、即ち彰信可汗の末年（八三九年）のこととするも、元和十四年（八一九年）即ち保義可汗の治世の末に近き頃、阿熱は既に可汗と稱し、爾來兩者の争鬪は引き續きたるものと見る可く、而して前に引きたる後唐獻祖紀年録に、回鶻の民の一部が漸く磧口を過ぎて榆林に至りしことを解きて、黠戛斯に迫られたる爲なりとするに據れば、黠戛斯は開成五年廬駁可汗を殺すに先立ちて、既に回鶻を壓迫したるものなるを認めざる可らず、保義可汗の紀功碑に見ゆる堅昆征伐は、可汗の即位以前の事と思はるゝが、然も其の在位中に於ても黠戛斯の阿熱が自から可汗と稱して回鶻と争ひ、遂に開成五年之をして潰裂せしむるに至りたりとすれば、兩者の争は實に保義可汗の治世以前より引き續きて絶えざりしものに外ならざりしを知るべし。

斯て回鶻にては、遅くとも保義可汗の時代より後は、唐書黠戛斯傳に「回鶻稍衰」と記せるが如く、北方には黠戛斯の逼るあり、而して西方には吐蕃との争絶えず、此の際葛邏錄の如きも、一時保義可汗の征討を被りたりとは雖、引き續きて服屬したるものに非りしなるべければ、常に頗る多難の状態に在りしや疑ふ可らず、殊に昭禮可汗以後三代の間は、内争紛亂を極めしかば、國勢大に衰へ遂に潰裂を招くに至りしが、然も此の間唐との關係に至りては、尙從來の有様と殆ど異なる所無かりしが如く、昭禮彰信兩可汗の册命も行はれ、朝貢互市も依然として繼續したるを見る、即ち昭禮可汗の時には長慶四年十二月、翌寶曆元年七月・十月及び十二月に朝貢し、太和元年三月絹六萬疋、同年六月絹二十萬疋、同三年絹二十三萬疋を以て回鶻の馬價に充て、又彰信可汗の時には太和九年六月